第31回ＯＭＳ戯曲賞選考経過　―2024年12月28日―

吉永 美和子

昨年で、第 30 回の大きな節目を迎えた OMS 戯曲賞。これまでは「扇町ミュージアムスクエア」を運営していた大阪ガスから引き継いで、大阪ガスネットワーク株式会社が単独で主催していたが、この第 31 回から、大阪に新しくできた劇場「Sky シアターMBS」を運営する「株式会社 MBS ライブエンターテインメント」が協賛、「ぴあ株式会社」「株式会社 FM802」が協力に付くことになった。関西では数少ない演劇関係の賞を、大阪のエンターテインメント業界全体が支えるべきものとして、認識されたことの現れだろう。

今回の選考会は、各委員のスケジュールの都合で、ほとんどの企業が仕事納めを迎えた 12 月 28 日に実施。そのため企業の会議室が使えず、大阪・心斎橋の小劇場「ウイングフィールド」を特別に開館していただくことになった。異例の事態ではあるが、もともと OMS 戯曲賞は、劇場内で選考会・授賞式・公開選評会をすべて行っていた過去がある。当時を知る元 OMS マネジャー・山納洋は、冒頭で「劇場で選考会を行うという、この雰囲気が懐かしい」と挨拶し、選考委員からも「劇場はどこに行っても落ち着く。『ここにいてもいい』と言われている気がする」（土田）「会議室だと、よその家でやっている感じがするよね」(佐藤) と、思いがけず好評の様子だった。

選考会は 12 時 30 分に開始される予定だったが、東海道新幹線の沿線火災の影響で、関西以外から向かっていた選考委員＆関係者が軒並み遅滞に巻き込まれるアクシデントが発生。13 時直前に全員がそろい、ようやく最終選考が開始された。

六作品の作家全員が、過去にも最終選考に残った経験があり、しかもそのうち四人が佳作を受賞しているという、過去最高にハイレベルと言ってもいいラインアップ。一回目の投票は、大賞にふさわしいと思う作品は〇、気になっている作品は△で、好きな数だけ入れることができる。その結果は、下の表の通りとなった。

もっとも支持を集めたのは、佐藤以外の全員から「〇」が入った山岡。その次が、どちらも「〇」と「△」が二つずつの植松と私道。次いで「〇」が一つと「△」が二つの橋本、「〇」が一つの山村、「△」が一つの伊地知という順番になった。まずは得票の状況とは関係なく、候補者リスト順に選考が開始された。

	佐藤	鈴木	佃	土田	樋口
伊地知	△				
植松		○	△	△	○
私道	△	○	△	○	
橋本			△	○	△
山岡		○	○	○	○
山村		○			

「コロナとは何だったか」を戯曲で考えた伊地知作品

昨年に続いて、最終候補入りを果たした伊地知克介。『光と虫』の舞台は、新型コロナウイルス（COVID-19）が世界に蔓延しはじめた頃、海外からの渡航者を隔離していた宿泊施設。たまたま隣室になった３組の男女たちが、ベランダ越しに自分の境遇や現在の心境を語り合うことで、当時の時代の雰囲気を映し出していく会話劇だ。この作品の上演のために結成された「わたしたちのヒカリ PROJECT」で、２０２３年二月に公演が実現している。

今回の最終候補作の中では、唯一新型コロナウイルスのパンデミックをストレートに描いた作

品に「私たちはすごく小さな小さな虫であり、同時にすごく小さな小さな光でもある。それと同じように、宇宙から見た地球はすごく小さな星だけど、きっと輝いているんだろうという、希望と好感度がすごくあった」（樋口）「バルコニーでの会話って、通常より（少し声を張り上げながら）このぐらい大きい声でしゃべってるんだな、って（笑）。その状況は非常に面白いだろうなと、役者として思った」（佃）との評価が。

その一方で「これからどういうことになるか、誰もがさっぱりわからないというあの頃の時間と、伊地知さんの得た知識を描きたいという狙いみたいなものはわかる。でもそれが登場人物にきちんと落とし込まれてないから、作者の顔がずーっと見えている感じがする」（土田）「パンデミックについて『こんなことが起こったかも』『こんなことが起こらなかったかも』って、すっごく考え抜いた作品が見たくて期待したけど、少々考えたレベルで止まっている気がしてしまう。たとえばモーツァルトについて書かれた芝居で『ちょっと楽しいモーツァルト』ぐらいだったら、あまり見たいとは思わない。（ピーター・シェーファーの）『アマデウス』ぐらい考えて考えて、深い所まで潜っていって触ってきたものを見せて欲しかった」（鈴木）などの、物足りなさを指摘する声も。

△を付けた佐藤は、伊地知の話を始める前に「今回は△が二つだけで、あとはまったく理解できなかった。というのは『演劇というものは何か？』という、根本的な所で大きなクエスチョンが付いてしまったから」と、今回の候補作全体に対するシビアな感想を述べる。続けて伊地知作品について「この作品を買ったのは、まずCOVID-19以前と以降というものを、きちんと意識していること。通過した以上、もう元には戻らないということをちゃんと書いている。もう一つは宿泊施設とは別に、宇宙という空間を（インターミッションに）置いたこと。話さない宇宙飛行士を出して、あの（ベランダの）関係性が完全に隔離されたものだと伝えてくる、その構図は面白い。そして最後に、生き残ったホタルが飛んでくるという所も上手くできているけど、皆さんが指摘されたような欠点は確かにあるし、戯曲として成功しているとは決して思えない。でも『あれ（COVID-19）は一体、どういうことなのか？』ということを、風俗的な題材としてではなく、戯曲という方法で考えようとしている。その思いは理解できるし、議論ができる本だと思った」と、ほかの候補作から飛び抜けていた点を説明した。

「失われるものはない」という
強い希望を描いた植松作品

『午前３時59分』で第24回の佳作を受賞した、植松厚太郎改め植松篤。第27回の『夕夕方暮れる』以来の最終候補となった『トレマ』は、自身の劇団「立ツ鳥会議」で２０２３年11月に上演した作品だ。道路の路面標示の「トマレ」が「トレマ」になったままの町で育ち、今は妻が出産を控えている佐倉井の前に、子ども時代の親友・円山がしばしば出現するようになる。やがて円山は会社の同僚や客の前にも現れ、佐倉井を否が応でも「過去」に向き合わせていくという、不条理かつ複雑な構造を持つ人間ドラマだ。

この作品については「本当に小さいけれど、自分の中では大きな不安……佐倉井の場合は、もうすぐ子どもが生まれるけど、本当に家族を守れるか？ という。そういう不安がある時に、子どもの頃に自分を助けてくれた円山君が現れる。そして円山君は円山君で、何十年もずっと佐倉井のことを思ってて。この物語は、二人のそういう思いがガチャン！ となった、そのことが書かれているんだなあと。僕も中学の時にいじめから助けてくれた、イケガミ君とツネカワ君というヒーローがいて（笑）、どんな状況の時でもどこかにこの二人がいるので、すごくこの関係が理解できた」（佃）「少し不思議な設定を使いながら、実は人間が生きていくために必要な『自分と向き合う』ということが描かれているし『世界を変えたい』という思いが、今回の中で一番感じられた作品。私たちの世界は、自分や人が何を選ぶかによってすぐさま変わっていくし、そこで選択されなかったことや、『言いたかったことがあったけど、何だっけ？』と思い出されなかった記憶は、永遠に失われてしまう。だけど、佐倉井が最後に円山に会うことを選んだ時に、失われたと思った会話がこの先できるんじゃないか？ だったら、失われるものなんて実はないんじゃない

か？ という希望を感じた」（樋口）という共感の言葉が出てきた。
　反対意見としては「随所に『あ、面白いな』という言葉はあるけど、戯曲じゃなくてエッセーでも書けるよね、と思ってしまった。エッセーの原稿１００本分になるネタを二時間分の戯曲に入れたなら、それは元がエッセーでもいいけど、これは失礼ながら 20 本分ぐらいじゃない？ って。伊地知さんの作品でも思ったけれど、登場人物ではなくて作者が直接しゃべってしまってますよ、という気がする」（鈴木）「登場人物が全員、何かの役割に落ちてしまっているから、各場各場で実は何もドラマが起きていない。円山の存在をどう考えたらいいのかも、 僕はよくわからなかった」（土田）「物語にするべき所を、全部モノローグにしてしまっている。面白い可能性がある題材なんだから、もっとストーリーを書いてほしい。あと円山の存在に興味が持てなかったら（興味が）離れてしまうんだけど、そう感じる人が客席にいることを忘れてしまっているように思える」（佐藤）などが上がる。
　また佐藤は鈴木の言葉を受けて「今回僕がすごく『（候補作を）読みにくい』と思ったのは『身辺からどれだけ離れられるのか？』という問題がすごく大きかったからだと、裕美さんの話を聞いてわかった。やっぱり戯曲というものは、作家の身辺や観念を客観化して、さらにそれを言語化……しかも『人がしゃべる言葉』に落とさなきゃならない。だけどその言葉自体が、（作家の）身辺のものしか使われていないことに、ものすごくイライラした。その会話は身辺では面白く思えるかもしれないけど、客観視ができる対象ではなくなっている」と持論を述べたが「この（植松）作品にはそういう所がなかった」と言ったことも補足しておく。

読んだだけで癒やされる
身体描写が圧巻の私道作品

　『いきてるみ』で第 29 回の佳作を受賞した「安住の地」の私道かぴ。身体の描写が詳細すぎるがゆえに、実際の上演の想像がつかないと、選考委員に衝撃を与えたのが記憶に新しい。未上演作品の『てばなれ』は、この日で離職する女性セラピスト（施術者）が、最後の訪問者の治療をしながら、彼女が受けた女性ならではの様々な体験を、ほぼ独白の形で伝えていく。施術者がどのように訪問者の体に触れているかというト書きが、解説のように細かく記されるなど、今回もまた肉体を深く追究した作品となっている。
　選考委員全員が指摘したのは、施術者のマッサージが自分の体にまで伝わってくるように感じる筆力の高さ。「僕は今月すごく体調が悪かったけど、ト書きを読むうちに本当に体が楽になった（笑）。施術者が抱えている、女性の体が消費される感触や、それを持て余す辛さとかも、すごく伝わってくる」（土田）「僕も読んでいて体が気持ちよくなったし、アロマの匂いまで感じて（笑）。こんなに五感に迫ってくる戯曲は初めて」（佃）「モノローグだけだから絶対途中で飽きると思ったけど、最後まで読めてしまうし、本当に体に指が入ってきていると感じた。舞台上に何か違うものを立ち上げる筆力、語り口が上手い」（佐藤）との評価が。また鈴木からは「人生の物語と身体の美しさをリンクさせていくことがやりたい本だと思うし、そのコンセプトはすごく買いたい。茶道のお点前がずっと見ていられるように、所作が美しく、かつ『今その人がどう思っているか』という所まで気持ちが入るような演出や演技ができたら、これはすごく観たい！」と、上演に期待を寄せるコメントも出てきた。
　一方で、施術者が受けてきた体験や、離職する理由については「施術をしながら自分の人生を語るというのが、チープというか、ありがちな感じがしてしまう。道端に咲いていた花の話とか、全然どうでもいい話題の方が良かったかも」（佃）「主人公が無垢すぎて、社会の方にしか悪がないという風に感じてしまう」（土田）「今置かれている人間との関わりをどうするか？ についてきちっと書かれてはいるけど、『受け入れてやるぞ』というこの結論は、まったく同意できない」（佐藤）などの批判が。特に樋口は「マッサージに関するテキストと、施術者の方のドラマのテキストが、上手く組み合わさっていないという違和感がある。マッサージはセラピスト育成のテキストに使えそうなぐらいの解像度なのに比べて、彼女が受けた痛みとか滞りを見つめる解像度の方が、少し弱いのではないかと。その痛みに、作家は本当にタッチできていますか？ 傷にちゃんと

届いていますか？ ということが、すごく疑問。だから彼女がセラピストになろう、あるいは辞めようと思うに至った思考回路、感情動線がブラックボックスになってしまっている」と、問題点を明確にしてみせた。

日常にフッと残している記憶
その蓄積を活かした橋本作品

第 22 回以来実に九年ぶりに、最終選考にノミネートされた「万博設計」の橋本匡市。『躾けられない獣の群れ』は、近年は演出活動に専念していた彼の久々の新作だ。橋本のワークショップ受講生たちで構成された「劇団サイショノキオク」で、２０２３年三月に上演している。とある田舎町で暮らす三姉妹が、新興宗教にハマる祖母、巨大ザリガニ釣りに人生を掛ける父、そんな家族を見限って家を出た母などのいる歪んだ家庭で育ち、それが消滅していくまでを、独特のタッチで描いた家族劇だ。

〇を付けた土田は「一つ一つのイメージが面白いし、しかもそれが嘘くさくない。最初はファンタジーぽかったけど、姉妹が大阪に出てきた所で、こちら（現実）の世界とリンクしてくる気がして。普通に暮らしている人たちの中にも、過去の何某に縛られている人がいて、僕らとすれ違って生きているんだなあという実感と、解放感があった」と評価し、他の選考委員からも「日常の中にあるものを、フッと記憶に残しておくという、その蓄積がすごくたくさんある作家だと思う。スーパーの食品売り場の光景のショットとか、すごくいい」（佐藤）「どのシーンもすごく劇的で、脳とか心をすごく刺激してくる。群れることで生き延びる獣のような家族の中で生きてきた姉妹は、たとえば結婚した時に、夫の家に沿って暮らしていくのか？ 沿わない人生を選ぶのか？ などと考えた」（樋口）などの、好感度の高い言葉が出てきた。

一方で「設定はとても面白いし、その深刻さや痛みのようなものを理解したいと思うけど、それらがいまいち伝わってこないのがもったいない。話の縦軸はいっぱい立っているのに、それぞれのエピソードがどうも上手く絡んでこないから、 読み終わった後に『で、なんだっけ？』みたいな気持ちになってしまう」（佃）「全部が均等に配分されている感じがして、作者は何に一番フォーカスを当てたかったのかが見えてこない。だから『なんだっけ？』という疑問が残ってしまうのでは」（樋口）などの評が。

さらに鈴木は、野田秀樹を例に出して「野田作品の俳優は『役になる』というより、野田さんの詩を舞台の上で大きくして、たくさんの人に伝える『魅力的な媒体になる』ことが重要だと、私は思っていて。それと同じように、この登場人物たちも作家の言葉を、ただ魅力的に伝えればいい存在になっている気がしてしまう。私は舞台上の俳優が起こす物語や関係性に連れていかれて、どこかにたどり着きたいと思うので、そのためには『この登場人物がどういう人か？』ということの方に魅力を感じたい。俳優自身の魅力みたいなものに立脚して、シーンシーンをお楽しみくださいという感じが、ちょっと私とウマが合わなかった」と疑問を投げかけると、佐藤がそれを受けて「戯曲の中の『時間』を作るというのは、物語を作ることとはまた別の作業であり、野田さんはそれが上手いんだよ。ストーリーを追わなくても、時間によって説得力を作っていけるから。そのためには台詞と時間と空間というものを、改めて作家が想像しないといけない……たとえば上演時間二時間という具体的な時間と、具体的な場所と、具体的な人間によって、全部それが実現されるという。戯曲はそこがなかなか難しい所なんだけど、この本は時間に対して徹底的に無自覚で、言葉だけが並んじゃっている気がする。作家がもっと身辺から離れて、客観視する必要があった」と指摘していた。

また樋口は、本作がワークショップ参加者用に作られたということで「上演団体名から考えると、ワークショップの参加者自身の記憶をつないで作った戯曲ではないかと。そういう縦のもの（記憶）を、ズバッと横に串刺すものがなかった。憶測に過ぎないけど、そういう気がする」という、特殊な創作現場ならではの事情に配慮した意見を加えていた。

悲惨でグロテスクで美しくて
痛快さすら感じる山岡作品

『祭りの兆し』で第八回の佳作を受賞したものの、出産＆家族の介護のために、10 年以上断筆していた山岡徳貴子。『そして羽音、ひとつ』はその体験を元に京都の劇団「トリコ・A」に書き下ろし、２０２３年 11 月に上演された作品だ。夫の DV を受け続けた、認知症らしき老女が住む家に、元ヘルパーや介護サービスの人間たちが、それぞれの思惑を持って来訪。彼らが老女と接していくうちに、彼女が隠している重大な秘密や、彼ら自身の問題が次第に明らかになっていく。重々しさの中にも、謎解きのような仕掛けもほどこされた人間ドラマだ。

選考委員の四人が〇を付けただけあり「登場人物の一人ひとりが非常にグロテスクで、気持ち悪いことを言ったりやったりするにも関わらず、可愛そうだとも思うし、キレイだとも思うし、わかるぜとも思う。一方ですごくサスペンスでもあり、どうなるんだ？ という気持ちで最後まで読めてしまった」（鈴木）「『これを直せば幸せになれる』というものが何もないことをわかっている登場人物たち全員が、そのどうしようもなさを老女に向けていて。そんな老女がとにかく逃げるというラストが、ものすごく美しかった」（土田）「老女が逃げた時に、僕は『あ、してやられた』と思った。認知症のふりをして周りに罪をかぶせて、自分はサッサと逃げたのだとしたら、このばあさんカッコいいな！ って」（佃）「圧倒的なクオリティ。女の人の苦しみはなんて深いのだろうと思わされつつも、社会のシステムや男性たちを一方的に批判、批評することもない。男と女と社会と人間が生き延びるための悪意を、こんなにも美しく書けるんだと思った。それは山岡さんという作家の個体を通して出てきた言葉であり、ものすごく作家の作業をしていると感じる」（樋口）と、称賛の言葉が次々に出てくる。

ただ一人〇を付けなかった佐藤は「この（最終候補の）中では一番いい作品」と評価したものの、なぜ〇を付けなかったのかについては「結局、今の日本の演劇の完成度ってこれか、とも思う。このような問題を描く時に、こういう趣向しかないことが、今の僕たちが陥っている穴ぼこじゃないか。山岡さんの身辺は、今彼女が生きている演劇界にあるような気がして、演劇というのはもうちょっと広いんじゃないか？ と。未来（の演劇）はこの方向には行って欲しくない」と説明。さらに戯曲の欠陥として「客席全体を表せるような場面が一つもなく、ここに集まった（選考委員の）人たちのような世代しか理解できない、というのが一つ。もう一つは、鳩の存在がきちんと描かれていないから、タイトルの『羽音、ひとつ』が効いてこない。さらにもう一つは、冒頭のヘルメットのやり取りを笑うことができない人も、この芝居を観ているかもしれないことへの配慮がない。重箱の隅を突くようではあるけど、世界中の劇作家が今そこで苦労しているんだから、この作家にはもう少し厳しく言っていいんじゃないか。これらの重要な要素が欠け落ちてしまっているのに、それを『完成度が高い』と言うのは、僕は嫌だと思う」と述べていた。

誰もが書けるものではない
敏感な言語感覚の山村作品

初めて未上演作品も選考対象となった第 28 回で、初応募作品『その桃は血の味がする』で佳作を受賞し、最年少受賞者記録を更新した山村菜月。未上演作品の『かぜのたより』は、年賀状のやり取りだけでつながっている高校生の男女が一歩踏み出そうとする姿を、四人の登場人物の会話だけで描き出した、当世風のラブストーリー。非常にもどかしい二人の関係の変化を『その桃は……』でも高く評価された、今どきの若者っぽいリアルな関西弁の会話で紡いでいく。

今回もまた「この面倒くさい二人の関係に、ちょっとキュンとしたりする。人物の欲求と目的というこの二つの要素だけで、よくこんなに書けるなあと思うし、よくこれだけ回りくどくなく言葉が出てくるなあと感心した」（佃）「昭和だったら『好きだ、バカ！』ですぐにつながれたと思うけど、令和の彼らは本質を回避するために、無駄なことをしゃべり続ける。それはすごく現代的な感じだけど、人を好きになることの本質は、やっぱりいつの時代も同じだなとも思った」（樋口）「やはりこの会話は誰でもが書けるものではないし、若いから書けるというものでもな

い。自分の傷口を『どのように痛いのか』を見せるのは、若い人の特権とも言える表現だと思うけど、これは血がわりとダラダラ出ている傷を見せられるような喜びが、とてもあった。小説だとそういう作品はよくあるけど、戯曲ではあまり読んだことがない」（鈴木）と、その個性にあふれた会話が高く評価された。

それとは逆に「登場人物が全員、同じように相手を茶化しているのが気になった。個々人で違う生活や性格や背景がある以上、やっぱり人物によって、台詞や距離感は多少変えていかないと。誰が言ってもいいような台詞になっていることに、ちょっともどかしさを感じてしまった」（土田）「彼女は敏感な会話感覚を持っていると思うけど、演劇というのは対話の多様性を書かないといけない。ここに一つでも違うもの……違う世代や、同世代でも違う感覚を持つ人との対話が入っていたら、すごく生きた戯曲になったはず。それができてないから、これは戯曲以前という感じがした」（佐藤）「今の若い人たちのつながり方はわかった。じゃあこの会話のやり取りをする人たちは、どんな世界を作るんだろう？ 若い作家だからこそ、その先を書いてほしかった」（樋口）などの欠点も上がる。

さらに佐藤は「この世代にしか書けない文体」という評に対して「イギリスのエドワード・ボンドは、60歳後半で19歳の兵士たちの会話を徹底的に調べて、（日本語）翻訳者が若い作家と間違えるぐらいの言葉で書き上げていた。劇作家は人間の言葉を使う仕事だから、その言葉を持つ人への社会批判と、その言葉に対する批判の両方を書き込むという作業ができないといけない。そうじゃなかったら、そこにいくら会話とストーリーがあったとしても、戯曲とは言えないと思う」と、作家の書く会話と年齢は関係ないと力説。

そして佐藤は続けて、今回の選考会を総括するかのように「今の日本の演劇の中で、何が一番遅れているかっていうと、戯曲。俳優も演出もいい人がたくさんいるけど、作家がいないんだよ。作家がいないというのは、翻訳をして海外に出して戦えるような作品がないということ。そこをしっかりするということを、やり始めないといけないと思う」と、今の日本演劇界への問題提起を投げかけた。

作家を売り出すためではなく
戯曲を生み出すためにある賞

また山村作品の選考の終わりに、彼女が佳作を取った『その桃が……』が未だに上演されていないことに加えて、他の戯曲賞も獲得しているものの、作品の上演実績が少ないという話題が浮上した。

これに対して土田は「僕自身、賞が欲しくてわりと振り回された作家だけど（笑）、やっぱり受賞は目標ではなく、副次的なものだという思いがずっとあった。でも今の……それこそ山村さん世代の若い作家は『僕は何年後に取れますか？』と、賞の話ばかりしている気がする。なんでそんなに、賞の奴隷になってるんだろう？ と思う」と疑念を口にすると、樋口からは「『賞を取れば生き延びられる』という思い込みがあるのでは。賞以外に（長く演劇を続ける）選択肢はいっぱいあるけど、自分が『それ』と思っている以外の世界はないと思ってるんじゃないか」と分析。

さらに山村に向けては「『なんか知らんけど、とにかくやってみよう』で芝居が打てた時代とは違って、今は自力で公演を打つのは大変かもしれない。でも死ぬ気で一回やってみたら『あ、なんや。できるやん』ってなって、二回目三回目は怖くなくなると思う。このままだと、描く世界が小さく収められていく感じがしてしまう」（樋口）「技術のことを考えるなら、上演した方が伸びる。自分で俳優と付き合えば、絶対に描ける人物の幅が広がるはず」（土田）「そのためには、上演に向けた意欲を沸かせてくれるドラマトゥルクを付けた方がいいと思う」（佐藤）などのアドバイスが送られた。

また佐藤からは、土田から言及のあった「上演よりも賞」という昨今の傾向に対し「それを言うなら、OMS戯曲賞は戯曲を生み出すための賞であり、作家を売り出すための賞ではない。評価されるために賞が欲しいというのなら、ここは違うよね」と、改めてOMS戯曲賞のスタンスを確認する言葉があった。

ラストに意見が分かれつつも
ほとんど即決で大賞が決定

全候補作について一通り議論が終わったあと、少し休憩をはさんで、16 時から二回目の投票が行われた。次は大賞に推挙する一作品だけに「〇」を付ける。その結果は、下の表の通り。

	佐藤	鈴木	佃	土田	樋口
伊地知					
植松					
私道	〇				
横本					
山岡		〇	〇	〇	〇
山村					

佐藤以外の全員が、山岡に投票。この作品自体のクオリティは認めている佐藤も「それでいいと思う」と、山岡の受賞自体に反対はしなかった。

ここですんなりと決まるかと思ったら、樋口から「今回は本当に悩んだけど、大賞を出さないという選択肢はないので、それだったら山岡さんにするという話」と、消極的な一票だという言葉が出てきた。

その理由として「老女は本当に自分から選んで、ずっとあの（逃げない）状態にいたのか？ と考えると、どうしても苦しくなってしまう。この作品を大賞にするということは、老女の生き方を肯定する……女の生き方を限定してしまうことになりかねない。いろんな見方ができるという風に書いているとは思うけど、やはりこういうこんがらかった状況に対して、一筋の光を示すことができるのが演劇の希望だと私は思うし、作家はそこから逃げてはいけないのではないか」と、選評中に佐藤が述べた反対意見と、少し重なるコメントを。

それに対して「あのラストが素敵」という鈴木は「『歩いているスピードと変わらないけど、本人は多分全速力で走ってるつもり』という姿は……たとえばすごく好きな人ができたり、すごく美しい目標ができたら、人は今すぐどこにでも走り出せるような感じに、体がなったりするじゃないですか？ 実際は走れなくても『すごく走れる！』と思える。そういう体になった人を応援したい、励ましたいという気持ちはあるんじゃないか」と擁護しつつ「ヘルメットの女が、老女の本当の娘じゃないとバラすのは、もう少し後でも良かったのでは。サスペンスで引っ張るなら、その手もあったのに」と惜しむコメントも追加。

その声を受けて、樋口は「ヘルメットの女が爆笑する絵面があれば、私は希望が感じられたかもしれない。老女が必死で逃げるのを見て、女が他のみんなと同じように唖然とするのではなく、一人だけ『逃げていいんだ』という風に爆笑してくれたら、次の希望を見いだせたのでは」という気づきを口にしていた。

こうして大賞候補作品の意見が出そろい、決定投票が行われてからわずか 10 数分後の 16 時 20 分に、山岡徳貴子『そして羽音、ひとつ』が、第 31 回 OMS 戯曲賞大賞に選ばれた。佳作受賞から大賞受賞まで、23 年間ものインターバルがあったのは史上最長で、そして当分破られることのない記録だろう。

奇跡を三つも用意した伊地知
その「人の良さ」がマイナスか

大賞決定後、続けて佳作の投票が行われた。実は大賞より、佳作の方が決定が長引くことが多い。というのも「この中で一番いいと思うもの」という基準がわりとはっきりしている大賞と違

い、OMS の佳作は「大賞の次に良かったもの」ではなく「新しい可能性を感じるもの」が選ばれる傾向にあるからだ。それは一番を決めるよりも、すり合わせが難しい作業だと、毎年選考会に立ち会うたびに実感する。

佳作を決める三回目の投票は、やはり佳作に推す作品一つだけに「○」を入れる。その結果は下の通り。

	佐藤	鈴木	佃	土田	樋口
伊地知	○				
植松			○		○
私道		○		○	
橋本					
山岡					
山村					

佐藤は伊地知、鈴木と土田は私道、佃と樋口が植松と、バラバラの結果に。まず佐藤が、大賞に推した私道ではなく、伊地知の方を選んだ理由について「伊地知さんはオーソドックスな意味で戯曲を作ろうとして、その設計図に基づいて書こうとしている。これだけの仕掛けは、自然にパッと思い浮かぶものではなく、一つずつを選択したんだと思う。その作業を通して何かを作ろうとする、その意志を応援したいんだよね。大賞の基準で選ぶなら私道さんだけど、佳作は『応援』という意味で入れたい」と説明。

それに対して他の委員からは「伊地知さんは、多分いい人なんじゃないかと（全員が同意するような声）。いい人だから『こうだったら面白いな』と思いついたことを、底意地の悪い観客に『それ、予定調和じゃない？』って言われることを考えず、ストレートに提示してるのでは」（鈴木）「コロナの時はみんながささやかな奇跡を望み、小さな偶然の出会いがすごく希望に感じられた。ただ、その奇跡を一度に三つも用意してしまうのが、確かに人の良さだと思う」（樋口）「実際僕もあの頃は、よく知らない人から突然『ZOOM でしゃべりませんか？』と誘われたりした（笑）。でもそんな風に『世界全体が不安だったから、普段しゃべったことのない人にも気軽に話しかけられる環境だった』という共通認識が、大前提になってしまっている。その感覚がわからない人にも、それがわかるように書いてほしかった」（土田）と、改めて弱点が上げられた。

演出家を刺激する私道作品
解釈が広る植松作品

私道作品に対しては、まず鈴木が「私がこれを舞台にするなら、ダンサーも含めて登場人物を六人くらいにして、他人を癒やすとか、温かみを伝えることの意味を膨らませて踊ってもらう。そうすると『ここ、（台詞）言わなくても踊ればいいんじゃない？』と拡大解釈ができる所が出てくるはずだし、この美しくてデリケートな言葉がベースにあれば、随分踊れる所があるなあ、と。そして私が間違っていなければ、そっちの方に行きたいテキストなのでは。身体表現と言葉がどう融合していくか？ という、とても新しい一つの試みだと思う」と口火を切ると、他の委員も「肉体は感情の道だから、上演に向けて演出家と俳優が構築していく方が絶対面白い。俳優の身体とともに構築していく戯曲のあり方では」（樋口）「戯曲ってやっぱり『上演』っていうのが、すごく大きなファクター。新しいことをやろうとしているという意識が、すごく積極的にある本だから、かなりいろんなことをやりたくなる。いっそ台詞をなくしても面白いかもしれない（笑）」（佐藤）と、演出家目線で改めて評価する声が相次ぐ。

植松作品の方は、○を入れた佃が「さっき信さんが『円山の存在に興味が持てなかったら読めない』とおっしゃっていたけど、僕は円山に夢中になったから、すごく面白く読めた。ただ僕がわからないのは、なんで佐倉井が会社を休むぐらい弱っていくのか？ ということ。○を付けとい

てなんだけど、佐倉井は会社を休まない方がいいんじゃないかなあ？」と思わぬ問いかけをして、全員から笑いが起こる。それに対して「すっごく頭の悪い言い方をしちゃうと、生霊的な感じ？別に霊的なものじゃなくても、その考えや感触に取り憑かれているということだと思う」(鈴木)「自分が向き合わなかったり、知らない振りをした過去を掘り返すと、しんどくなっていくのと同じことでは。そういう意味では、取り憑かれてるとも言えるかな」(樋口)「それで言うと僕は、円山まで弱っていく理由がわからない。円山が佐倉井の現実を侵食して、ムキムキになっていくというのなら、まだ理解ができるんだけど」(土田) などの返答が。想像力を働かせれば働かせるほど、さらに疑問や解釈が出てくるという状況になっていく。

もう一人植松を推した樋口は「どれを推すか本当に迷ったけど、この作品はちょっとだけ『ここにいるけど、いない人』に思いをはせることができた。たとえばスーツ姿なのに野球帽を合わせてる人とか、普段着なのに足元はハイヒールとか、チグハグな姿のまま町を歩く人たちに、大阪だとよく遭遇する (ここで選考委員から次々に「そんな奴本当にいる？」「池袋ならいそう」「黄金町はいるね」など、それぞれの町の話が飛び出していた)。その人たちって、存在していても実はここにいない。日常で急いでいる時は目の端にも入らないけど、ふと『あれ？ 何かさまよってる人たちがいる』と気づくことがある人たちで、円山もそれなんだと。佐倉井が最終的に『ここにいるけど、いない』はずの円山に気づき、自分の過去と向き合うという所に集約されていく話ではないかと、私は思った。この設定は確かに難しいけど、登場人物たちはこの世界のシステムを理解できていて、(読む側は)『なんでだろう？』と思う点がたくさんある」と、内容は興味深いけど書き足りない所がある点を指摘していた。

時計が 17 時を回り、議論がやや膠着状態となった所で、司会を務める OMS 戯曲賞の世話役・小堀純から「もう一回投票しましょうか」との声がかかった。四度目の投票が行われ、やはり佳作に推す一作だけに「〇」を付けることに。その結果は下の通り。

	佐藤	鈴木	佃	土田	樋口
伊地知	〇				
植松					〇
私道		〇	〇	〇	
橋本					
山岡					
山村					

「変えられない過去を変えようとする、動かしにくいことを動かそうとしている『トレマ』を最後まで推したい」という樋口に対して、佃は「やっぱり佐倉井が会社を休んじゃったのが、結構重くて (一同笑)。佐倉井だけならともかく、(円山と) 両方ともフラフラじゃない方が良かった気がしてきた」との理由で、私道に票を移した。佐藤は再び伊地知に入れたものの「私道さんでも全然構わない」という注釈付き。そこで樋口も納得の上で、『てばなれ』が第 31 回の佳作に決定した。佳作を二回以上受賞したのは「A 級 MissingLink」の土橋淳志、「コトリ会議」の山本正典以来三人目となる。

やはり劇場が会場だから？
例年よりなごやかな選評会

四日後には２０２５年を迎えるという、年末にもほどがある土曜日にも関わらず、授賞式&公開選評会の場となるウイングフィールドには、多くの最終候補者とその関係者、一般の観客が訪れた。　久々に授賞式という場に登場した大賞の山岡は、受賞の挨拶で「育児と介護に追われる日々で、10 年以上演劇の現場から離れておりましたので、まさかこんな大きな賞をいただけると

は思っていませんでした。いろんな方にやっと喜びの報告をさせてもらうことが何よりも嬉しいですし、これからますます真剣に作品に取り組んでいかなければいけないと思います」と感慨深げに語ったが、続けて「大賞を取った時のコメントは考えていませんでした。賞を取れなかった時の自分の慰めの言葉しかノートに書き綴ってこなかったので、これ以上言葉が出ません」と思わぬ告白をして、会場が沸いた。

佳作の私道は「高校生ぐらいの頃からOMS戯曲賞はなんとなく知っていましたが、二年前に佳作を取った時、やっと（選考委員の）皆さんのお顔を拝見する形になって。それ以来、何かと皆さんの顔がチラッと浮かんでくるという、ある意味視線を探してもらっている賞です」と、受賞が励みになっていたと述べる。さらに「今回の作品は、俳優の辻村優子さんの体験をモチーフとして書かせていただきました。私一人ではなく、いろんな方の体験を混ぜ合わせて作品を作っていくということが、これからのスタンダードになりそうで、個人的に節目だと感じています」と、この作品がターニングポイントとなる予感を語った。

授賞式に引き続いて、公開選評会が行われた。山岡と私道には、選考委員五人全員から。さらに伊地知には佐藤、植松には樋口、橋本には佃、山村には土田から選評が送られた。選考会でも「劇場は落ち着く」という言葉が全員から出ていたが、授賞式と公開選評会もまた、いつもより全体がリラックスしているような空気感が感じられた。やはり劇場から生まれた戯曲賞だけに、誰もがなんとなく、里帰りしたような心持ちになっていたのかもしれない。

長編を成立させる力を持つ
久々の戯曲作りはヘトヘトに

大賞を受賞した山岡に、今回久々に戯曲を書こうと思ったきっかけを問うと「トリコ・A の山口（茜）さんと、劇団飛び道具の大内（卓）さんとで、戯曲を読む会をやっていたのですが、その流れでリーディング作品を作ることになりました。そこで私は、介護でがんじ絡めの生活が続いた自分の経験を掘り下げて、社会を見るということをやってみようと。さらに、介護する側とされる側、暴力を振るう側と振るわれる側みたいなことをステレオタイプに描くのではなく、多面的な人物の集合体を描くことを意識した小品を書きました。その後、『このリーディング作品を長編作品にブラッシュアップして公演しましょう』と提案していただいたんです」との答えが。

15 年ぶりとなる長編を書いた時は「リーディング作品を書く時にもブランクは感じましたが、やっぱり長編を成立させるだけの力を持たせるのはヘトヘトになりました」と苦笑。しかし山口が演出した舞台は「戯曲を理論的に詰めていって、山口さんにしかできない作品を作り上げてくださいました」と、大いに満足したそうだ。また老女役には若い俳優を起用していたが「どの年代の俳優が『老女』を演じても面白いと思います。若い方が演じれば、それは老女の内面が若く見せているという捉え方もできたり。年代によって面白さや印象が全く変わる作品になると思います」と言う。

実は山岡は、最初は戯曲賞の挑戦にためらい、締切ギリギリで応募してきたという経緯がある。「ブランクのある私が、今さら出してもいいのか？ という戸惑いがありました。でも今は本当に、選考委員の皆さんに頭が下がるというか。真剣に読んで全力で感想を言ってくださったので。「そうですよね」「そうなんです！」と、深く対話している感覚になって興奮しました。あれほどダイレクトに批評してもらえる機会はないので楽しかったです」と、その結果に笑みを浮かべる。と同時に「この作品を書いてから一年が経つんですけど、また作品に取り組みたい気持ちにはなってきました。まだ時間はかかると思いますが、次の作品を発表できたらと思います」と、本格的な活動再開に前向きな姿勢を見せた。

セラピストを辞めるラストが
実際に起こってしまった？

一方私道は「前回佳作を取った時に、いろんなご指摘をいただいて、そこを乗り越えられるの

か？ と考えながら、この二年間やっていました。再び感想をいただけて、本当にありがたい場所だと思いました」と、この場に帰って来られた喜びを語ったが、選考委員たちの言葉には「まさか『癒やされる』なんて言われるとは思わなくて、ひたすら動揺しました（笑）。そんなことがあるんですね」と、その反応はまったくの想定外だったそうだ。

今回の戯曲は、受賞の挨拶で名前の上がった辻村を始めとする、幾人かのモデルがいるが、彼女たちの言葉を施術者のモノローグに集約した理由について「セラピストの方って体一つでずっとされていて、それは体一つで舞台に立つ俳優とリンクする所がある。その切実さを、舞台に上げたいなと思いました」と語る。また今後の上演については「しなければいけないと思いました（笑）。鈴木さんがダンサーと作ることを提案されていましたが、確かに身体に寄った表現もいいですね」と意欲を見せていた。

その場に同席していた辻村から、私道に「なぜ『てばなれ』というタイトルにしたのか？」という質問が。それに私道は「辻村さんから、施術する側はできるだけ（マッサージする人から）手を離さないと教えてもらったけど、幾人かのセラピストさんに話を聞いても、やっぱり皆さんそういう心構えがあって。それが共通しているというのが、すごく自分の中に残ったというのがありました」という裏話を。

さらに辻村が「かぴさんが戯曲を書いていた頃、私はまだセラピストだったんですけど、でき上がったというのを聞く前に、本当にセラピストを辞めたんですよ。何か辞めそうな雰囲気があったのかな（笑）」と驚きの事実を告げる。私道は「いや、たまたまです」と笑って答えていたが、実際に良い作品というのは、なんらかの偶然のリンクがつきものだったりする。これもまた、そういうちょっとした奇跡のエピソードかもしれない。

昨年『みえない』で大賞を獲得した武田操美も、10 数年ぶりに書いた長編戯曲での受賞だった。選考会の終わりに、戯曲賞を第一回から見守り続けた小堀から「作家にブランクなんかない。前の作品と、今の作品があるだけ。次の作品さえ書けば、その間が何年開こうが一緒なんだと思いました」という言葉が出ていた。過去の受賞者の中には、現在も精力的に執筆活動を続けている人も多いが「そういえば、しばらく名前を聞かないなあ」という作家も何人か存在する。武田と山岡の相次ぐ大賞受賞は、劇作家はどんなにブランクがあっても、「劇を書きたい」と思った瞬間にいつでも劇作家に戻れるという、大きな刺激と励みになったのではないだろうか（ちなみに小堀の話を聞いた佃は「僕は半年書かなかったら、もう書き方を忘れるかもしれない（笑）」と言っていたが）。

OMS 戯曲賞は、来年もまた引き続き新しい作品を求めている。ただ、今回の選考会で出てきた、個人的にも印象に残る言葉―「OMS 戯曲賞は戯曲を生み出すための賞であり、作家を売り出すための賞ではない」ということを少し意識した上での、積極的な挑戦を期待したい。

（文中敬称略）